北海道医報
ISSN 0913-0217　2026.5.1. 第1292号
発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp
頒価 1部 275円（税込）

戦争を知らない子供たち
―世代間の分断を乗り越えて―

情報広報部　山科　賢児

ウクライナでの戦闘、ガザで続く空爆、ホルムズ海峡の緊張――世界は戦後最も危機的な局面にある。こうした国際情勢は、日本にとって、もはや遠い出来事ではない。エネルギー供給の不安定化、同盟国との関係や周辺国の軍事的行動など、日本は否応なく世界の不安定化の渦中に巻き込まれ、安全保障の議論は避けて通れない状況にある。

40代の医学研究者と安全保障について議論する機会があった。「戦争をしてはいけない」点では一致していたが、同じ「戦争を知らない子供たち」である私たちの間にも、「武器を持たない平和」、片や「武器によって保たれる平和」という対照的な平和観の違いに、大きな隔たりがあった。この相違は単なる政策選択の違いではなく、日本社会に根強く存在する世代間の歴史的断絶に由来するのではないかと感じた。

戦後25年、1970年代の日本社会の中心には戦争体験者がいた。敗戦と同時に民主主義を受け入れざるを得なかった彼らは、明治以来の国家観や天皇制への忠誠を身体に刻んだまま、新しい価値観へ適応しつつも「生き延びるための現実」を、何より優先した。

一方、戦争を知らない世代である若者にとって、戦争は「伝聞の記憶」であり、実体験ではない。そのため、戦中派が当然としてきた戦前からの価値観に違和感を覚え、自由や個人を尊重する民主主義の本質を求めた。日本を「変えられる」と信じたがゆえに、純粋さと脆さも抱えていた。

「戦争が終って僕等は生まれた　戦争を知らずに僕等は育った」。この歌詞は、戦争を知らないことに引け目を感じることなく、平和を求める思いを率直に示している。戦争を知らないからこそ戦争を拒む、その素朴で力強いメッセージは、世代間の断絶や偏見に傷つきながらも、「平和を願う」当時の若者の心情に強く共鳴し、学生運動の時代を象徴する歌となった。

学生運動は一定の社会的影響力を持ったが、派閥対立と内ゲバの激化、さらに社会環境が変化し、最終的には自壊的に終息した。大学という安全地帯での闘争は国民的支持を得られず、「ごっこ」と揶揄され、残ったのは成功体験ではなく挫折の記憶だった。

この挫折は次世代に「声を上げても変わらない」という無力感を残すことになる。80年代以降の若者は政治への関心が薄れ、社会全体に「従順さと諦め」が広がり、「政治は国が決めるもの、社会は変わらないもの」――こうした空気が家庭、学校や職場に浸透していった。

現代の若者は、70年代の理想主義を「旧い」と片付けがちだが、共感や共鳴を決して失っているわけではない。彼らはスマートフォンを通じてリアルタイムの戦争映像を見て育ち、戦争を「過去」ではなく「現在の危機」として感じている。声を上げないのは、炎上のリスクや行動が晒される恐ろしさを知り、失敗が許されない社会を生きているからである。慎重ゆえに沈黙しているだけで、無関心ではない。

日本には世代を超えて語り合う場が乏しく、異なる経験を共有する文化も育っていない。例えば、家庭では政治について語られず、学校では議論の訓練が十分に行われず、職場では上下関係が対話を阻む。こうした環境の中で、世代間の違いは「対話」ではなく「断絶」として固定化されてしまう。

この断絶が生む沈黙は、政治にとって利用しやすい構造となる。力によらない平和か、力による平和か。この二項対立が強調されるほど、社会が必要とする本質的課題から注意が逸れ、社会的規範は画一化していく。雑多な価値観を失った社会は、外圧に脆弱であり、内部の異論を排除してしまう。

本来、世代間の差異は対立の原因ではなく、社会の多様性を支える資源である。戦中派のしぶとさ、70年代の理想、現代の若者の現実感覚――これらを互いに補い合えば、社会に広がりが生まれる。しかし対話が失われれば理解は生まれず、理解がなければ対立へと転化してしまう。

国際情勢が緊迫する今こそ、世代間の断絶を放置することは危険である。平和観や安全保障観の違いは、経験や心情の差から生まれた自然な多様性にすぎない。世代を超えた対話を再構築し、多彩な視点を社会の基盤に取り戻さなければ、極端への流れは食い止められない。

対話とは、難解な理論から始まるものではない。ただ「聞くこと」と「話すこと」だ。聞くことで相手の世界が少しだけ自分の中に入り、話すことで自分の世界を相手に伝え、同時に自らの考えを確かめる。こうした対話の積み重ねは、世の中を見る眼を開き、理解の幅を広げる。

異なる経験を持つ者同士が互いの前提を知り、価値観の違いを理解し合うとき、社会は分断ではなく成熟へと向かう。対話はすぐに社会を変える大きな力にはならないかもしれない。しかし「聞き、語り、理解し合う」その営みこそが、分断を超える最初の一歩となる。ジローズのこの歌は、100年後、200年後の子供たちも、「戦争を知らない子供たち」でいられる未来を願っている。